

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	和歌：文苑
Author(s)	高橋，湖村；花柴；白月
Citation	龍南會雜誌， 1 2 4： 5 0 - 5 2
Issue date	1908-03-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6095">http://hdl.handle.net/2298/6095</a>
Right	

灰にくづれぬめがたき  
はかなき歌あれ脈の血は  
ふかきに搏ちてあふるゝが

柩をたほふ布のこと

雪のすがたのしづけさに  
山はねぶれるさまながら  
あつきはのほのもゑくゝて

ひそめる底をたれか知る

春の入日の秋に似て

野川にあさき如月や

戀をさぶがるひとりごは

こゝにさびしきかぐさめの

涙は水にちがるなり

## 和歌

高橋 湖村

もの皆を地に歸して清淨の白梅に凝る天地の精  
梅散りぬ清らのみ魂招かれて天にかゑるとその夜のうらみ  
もの賣の遠のくあとを短か日は寒しけに暮れぬ町の雨かな  
風は天に敗れし魔の軍の冥路にかへると聞く夕かな  
その夕べ胸の傲りの高ふりに行き交ふ人を小さしと見ぬ  
此のまゝに石ともかれよ死ぬるとも人のつれなき素振は見じか

野の王者清き最後を君見よと夕日をあびて散る銀杏かな  
或夜得く嵐のうちの樂の音は夜ごとく耳に通ひぬ

花

柴

小松原ぬけて海見る砂月夜一碧水る三千里かゝ  
眞白ろ頬にゑみのこぼるゝ唇は雪の中より薔薇開くあり  
べに融かすあひだを庭に鶯とありて歌はむ紅梅日和  
眞晝野のうら若草の夢の波薄紫にひろがりにつれ  
我が魂は君がみ胸の牢獄住み眞鉄の綱につかかれて泣く  
「物いはぬ人は彩湧く朧ろ夜の花の精よ」とたゞへて歸る  
いざ霞花野のなかにつゐがるゝ夢と夢とは紅ろに捲け  
涙もてつちかはれつゝ胸の中に日毎生ひ立つ紅ろの花

白

月

「野の王」の驕り寂びたり丘の上に夕暉を浴びる夕枯銀杏  
馬の背に旅人一人暮れてゆく枯野十里に鐘の音迷ふ  
君見んと君が門邊を幾往返今日も甲斐なく人の祈るか  
君逝いて何を驕りの白梅と疾く散りてゆけ地に香ると  
巢立ちする白き一羽の雛鳩の眼にやどる天地の春

振り袖の長きをはこる舞姫よ夢見るあかれ星の眸に  
黄金の冠いかめし日の神は征矢手ばさみて白駒走する  
若き日の狂ふ血潮の高鳴りの音にこそ響け阿蘇の遠鳴

# 新躰小品三則

## 其一

桑野 禮治

○古有牧童稟性穎悟善於辭令難疑答問快辨注射名  
播遠邇國王聞之疑其溢濫召之問曰汝能揣摩的中神  
妙寡人今設三問而汝能答之寡人當視汝如子也童請  
試問王曰大海之中所容水滴幾許童對曰大王能令地  
上江流无一滴注海乎乃野人能算海中水滴王曰天上  
星辰其數幾何童請賜筆紙亂点无數使人凝視目眩而  
對曰天上之星辰点出紙上无漏王曰日諸月諸何所盡  
也童對曰王亦聞夫金剛石山乎其高低與廣袤俱一里  
也每百年有小禽一來磨其嘴而去此金剛石磨盡之時  
即時刻盡之時矣王大喜曰寡人以汝爲子也

## 其二